

やまゆりの郷地区中山間地域総合整備事業区画整理に伴う

上組団地茶屋谷遺跡発掘調査報告書

1998年1月

島根県

佐田町教育委員会

やまゆりの郷地区中山間地域総合整備事業区画整理に伴う
上組団地茶屋谷遺跡発掘調査報告書



1998年1月
島根県
佐田町教育委員会

序 文

佐田町教育委員会では、「中山間地域総合整備事業やまゆりの郷地区圃場整備事業」に伴う上組岡地茶屋谷遺跡発掘調査を、島根県出雲農林振興センターの委託を受け実施いたしました。

佐田町では、町の中心に2級河川の神戸川が流れしており、その支流であります波多川、須佐川、伊佐川を含めた川に沿って民家が散在し、集落間を結ぶ道路網が広がっております。

この度の発掘調査によりまして、今までにも神戸川上流部では、先史時代の遺跡が発見されたことを、たびたび見聞いたしておりますが、北流して神戸川に合流する、波多川沿岸においても歴史時代以前の人々の暮らしの跡が見えてきたことに、大きな感動を覚えております。

本調査は、工事の性格上、緊急を要するもので期間の制約と、たまたま酷暑の時期ということもあります、調査員はじめ作業に携わって頂きました皆様には、大変ご苦労をおかけいたしましたが、この成果が今後の地域研究に一層貢献することを期待し、また埋蔵文化財に対する理解に多少ともお役に立てればと思うところでございます。

最後になりましたが、この発掘調査に当たりまして、調査ご指導いただきました県教育庁文化財課および各関係機関、地権者、地元自治会等各方面の皆様方のご支援ご協力に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成10年1月

佐田町教育委員会

教育長 田 中 雄 治



例　　言

- 1、本書は島根県簸川郡佐田町大字上組地内の「やまゆりの郷地区中山間地域総合整備事業区画整理」にともなう茶屋谷遺跡の発掘調査の記録である。
- 2、調査は島根県出雲農林振興センターの委託を受け、佐田町教育委員会が島根県教育長文化財課の指導を得て平成9年8月5日から平成9年9月20日まで実施し、その後、遺物の整理と成果のとりまとめを行った。
- 3、調査体制は次の組織構成で行った。

調査主体者	佐田町教育委員会 教育長 田中雄治
調査指導	西尾克巳 島根県教育庁文化財課埋蔵文化財係長
	岩橋孝典 島根県教育庁文化財課埋蔵文化財係主事
調査員	田中迪亮 島根県文化財保護指導委員
調査補助	田中昭久 臨時補助員
事務局	和田喜好 佐田町教育委員会教育課長
	深井健一 佐田町教育委員会生涯学習係
	今村久人 佐田町教育委員会臨時職員
調査作業員	藤原博幸 鹿田宮祐 渡辺 宏 三浦弘夫 梅村一夫 三原幸江 馬瀬萬一 藤原和子 森山幸子 山崎久和
遺物整理	田中君枝

- 4、本書の編集、執筆は田中が担当し、遺物の実測、図版等の収集と編集の補助は田中昭久が行った。
- 5、本書の遺構配置図の方位は国土座標による第Ⅲ座標系に準ずるが、個々の遺構については調査時の磁北を示す。縮尺は一律ではない。
- 6、本書の第2図は建設省国土地理院の承認を得て複製した佐田町全図(1:25000)をトリミングして使用した。(国土地理院中複第136号)
- 7、調査作業員については頓原町教育委員会八神調査事務所に手配していただいた。また作業員諸氏には酷暑の中での作業でご苦労をおかけした。記して謝意を表する。
- 8、佐田町大字宮内所在の塚脇遺跡については、平成9年7月、夏休みで祖父母のもとに帰省していた出雲市立朝山小学校6年生、影山紫穂さん、同小学校5年生、影山彩瑠さん姉妹が調査地周辺の表土堆積地の上中から土器片を探取し、届け出があったことが調査の端緒となり、またその対応について出雲市教育委員会に援助頂いたことを報告し、謝意を表する。
- 9、出土遺物、写真は佐田町教育委員会に保管する。

目 次

序

例 言

I	調査に至った経緯	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
IV	遺構に伴う遺物名説（竪穴住居、土坑、溝状遺構）	10
V	遺構外出土の遺物	17
VI	小結	20
VII	附編、塚脇遺跡の調査と出土遺物について	22

掲図目次

図1	佐田町位置図（中表紙）	
図2	茶屋谷遺跡、塚脇遺跡とのその周辺の遺跡位置図	2
図3	茶屋谷遺跡遺構配置図	3
図4	茶屋谷遺跡土層図（遺跡中央部の柱）	5
図5	住居跡（SI01, SI02）実測図	7
図6	土坑群実測図	8
図7	土坑群実測図	9
図8, 9, 10		
	土坑出土遺物実測図、拓影	13～15
図11	S D 0 2 出土遺物実測、拓影	16
図12	遺構外出土遺物実測、拓影	18
図13	出土石器類実測図	19
図14	塚脇遺跡出土遺物実測、拓影	22

写真図版 PL1～PL13

I 調査に至った経緯

本遺構の調査は平成9年度事業として行われる「やまゆりの郷地区中山間地域総合整備事業区画整理」に伴う調査で、町内6地区的団地で計画された工事区域の中の1か所である。

6地区の団地については事前に表土のハギ取り終了後の確認調査を行った結果、本遺跡と大字宮内の塚脇団地の一部で繩文土器、土師器を採取した。その他の地域は神戸川、朝原川沿岸の低位段丘上の水田で、耕作土上の直下はシルト、砂礫、大小の岩屑が堆積する氾濫原で遺物、遺構は認められなかった。

2か所の遺物散布地のうち茶屋谷遺跡は中位段丘上にあり、一部にやや厚い黒色土層が認められ、遺構が遺存することが考えられることから急きょ、発掘調査をおこなった。大字宮内の塚脇遺跡については本遺跡の調査終了後に着手することとした。

II 位置と歴史的環境

遺跡の位置は巣川郡佐田町大字大呂、上組地内の北流して神戸川に合流する波多川右岸にあって、東部の山岳地、東中山地区を源流とする谷川が波多川に注ぐ合流点の上流側段丘上にある。

標高は125mで波多川河床との比高差は6mある。調査地周辺の水田は過去に小規模の区画整理が行われたといわれている。その周辺は耕作土下50cm前後の黒色土層のこる区画があり、遺物も認められたことから、この区域を調査の対象とした。

この地域の歴史的沿革は『出雲国風土記』(注1)によると「飯石郡須佐郷」に属しており、「波多川」の記述として「鉄有」と記し、既にこの地方で鉄生産がおこなわれていたことを示している。

本遺跡から300m上流の左岸山裾には坂本古墳(島根県遺跡地図出雲、隠岐編a52)がある。この古墳は墳丘は削り取られた斜面で現況は畑であるが、両側の側壁の一部が残って露出している。

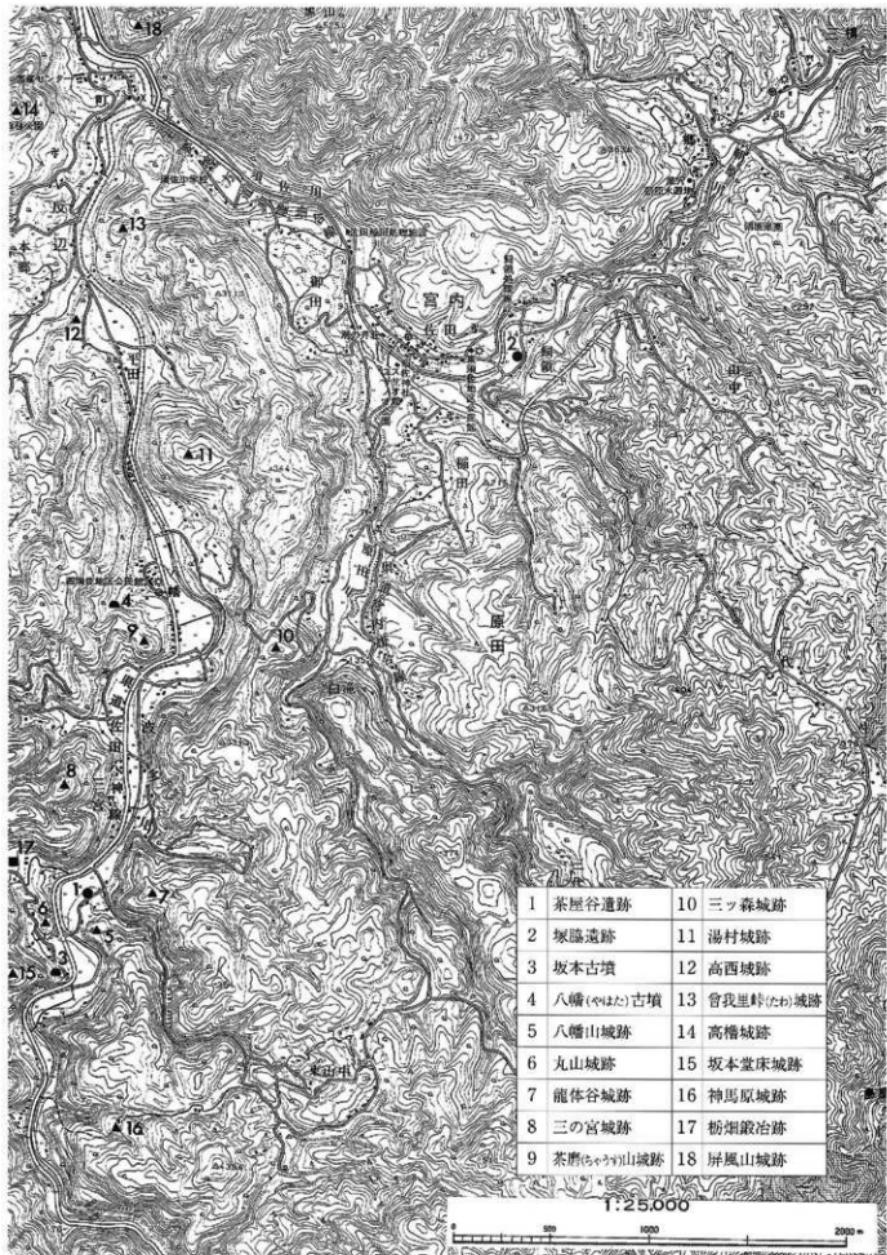
この古墳から2km下流の左岸山裾にも石室構造の残る八幡(やはた)古墳(島根県遺跡地図出雲、隠岐編a39)がある。この古墳も墳丘は削られているが、5枚の蓋石が残る玄室と羨道の区別のない無袖形の横穴式石室で、幅が狭く細長いという特徴がある。この傾向のものは山陽側に多く古墳時代後期に盛行している。この古墳は遺物は検出されていないが、形式的には陰陽古墳文化の交流を示唆しているものといえよう。

また本遺跡の東側100mの丘陵上には庭反(にわそり)古墓(宝篋印塔)、200m東の標高170mの山上には畝状竖掘群をもつ八幡山城(島根県遺跡地図出雲、隠岐編a164)が西側に流れる波多川流域を見下ろしている。

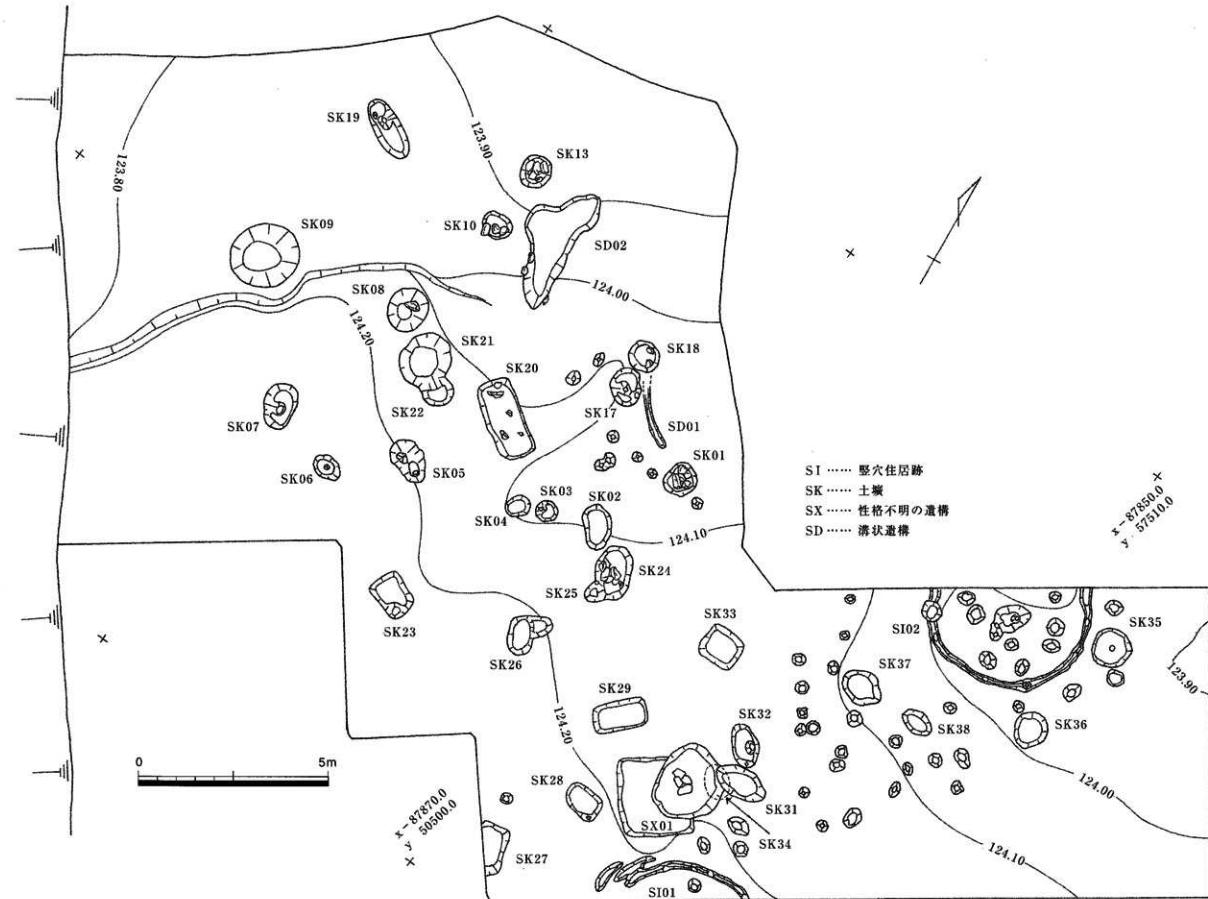
中世の山城跡は蛇行する波多川の曲角に突出する丘陵先端部に例外なく配置されており、それぞれの死角を補完していたようである。

この流れに沿う道は古くから山陰と山陽を結ぶ街道と言われており『出雲国風土記』が伝える「波多の径(はたのみち)」に比定されている。

古墳時代以前に測る遺跡は波多川周辺では、源流となる飯石郡掛合町大字波多地内も含めて今まで知られていないかった。



第2図 茶屋谷遺跡周辺遺跡分布図



第3図 茶屋谷遺跡遺構配置図

III 調査の概要

イ、調査地の堆積土層

水田耕作土の下層は鉄分沈着によって固結した厚さ10cm～15cmの耕整層で、その下は厚さ50cm前後の黒褐色土で遺物を包含する。

遺構が検出された土層はその下の砂質土層で河川による堆積層である。この砂質土は区域によって粒度が異なるが、微粒な砂は火山灰で2次的な堆積と判断した。

この火山灰は水分を含むと灰色であるが、乾くと白くなるもので、三瓶山東部に分布するハイカに酷似する。この火山灰の正式名は三瓶大平山降下火山灰とよばれ、畠原町大字志津見地区の板屋遺跡（注2）の発掘調査によってこの火山灰層は中に黒色土を挟んで上下2層に分かれ、下層は角井降下火山灰であることが確認されている。発掘調査にあたっては上層の火山灰を第1ハイカと呼び、下層を第2ハイカとよんでいる。

上下2枚の火山灰はc14測定によってそれぞれ時期が異なることが確認されたことから遺跡の時期を特定する鍵層になっている。

本遺跡に堆積した火山灰は直接の降下物ではなく、上流に降下した灰が押し流された2次堆積であるが、降下から現地にいたる時間差はあまりなかったものと考えられる。

本遺跡で出土した遺物は板屋第3遺跡の第1ハイカ面で出土した遺物と時期的にはほぼ一致している。

ロ、検出遺構と遺物

耕作土の下層、厚さ50cm～60cmの黒褐色土を取り除いたあと、その下層で検出した遺構は、土坑38、竪穴住居2、溝状遺構2のほかにピット群がある（第3図）。

土坑は形状、大きさ、深さはまちまちで遺物は縄文後期、晩期、弥生後期に分かれるがいずれも小片で全形が伺えるものは1点であった。各土坑の法量は別表のとおりである。

竪穴住居跡は調査区外との境界で2棟検出したが、周囲の壁等は消失し、わずかに住居内に拘り込まれた周溝と内部のピットによってその痕跡が伺えるものであった。床面はほぼ平坦であるが遺物はなく上部が消失していることは水によって洗い流された結果であろうか。

わずかにS102のピット内で器面にハケ目をもつ土師器の小片が出土したことから弥生時代の住居跡と推定した（第5図）。

溝状遺構のうち、SD01では遺物は出土しなかったが、SD02については発掘当初は土坑群の切り合いかとみられたが、縄文後期から弥生後期にかけての遺物が混在した状態で出土し、層位的に分類できず低地に流れ込んだもの、溝状遺構と判断した。

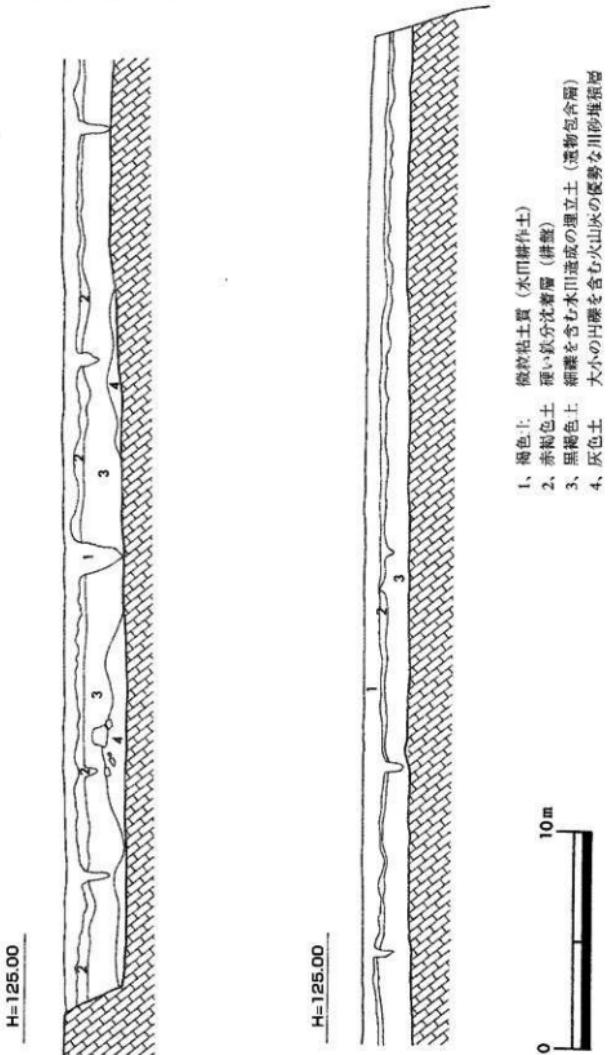
ハ、包含層の遺物

地山を覆う黒褐色土層では遺構は検出できず、地表面までを包含層として一括で遺物をとりあげた。しかし部分的に集中して出土したところがあったことを考えると、これらの遺物は遺構の存在位置を反映していたかも知れない。

縄文土器は主に粗製の深鉢、鉢が多く有文土器は少なかった。形式は彦崎KII式並行期から岩田IV類並行期に至る時期までのものである。

弥生土器は主に後期の複合口縁をもつ甕で、口縁端部が直立気味に伸び端部が肥厚して櫛描きの沈線が入るのが特徴である。

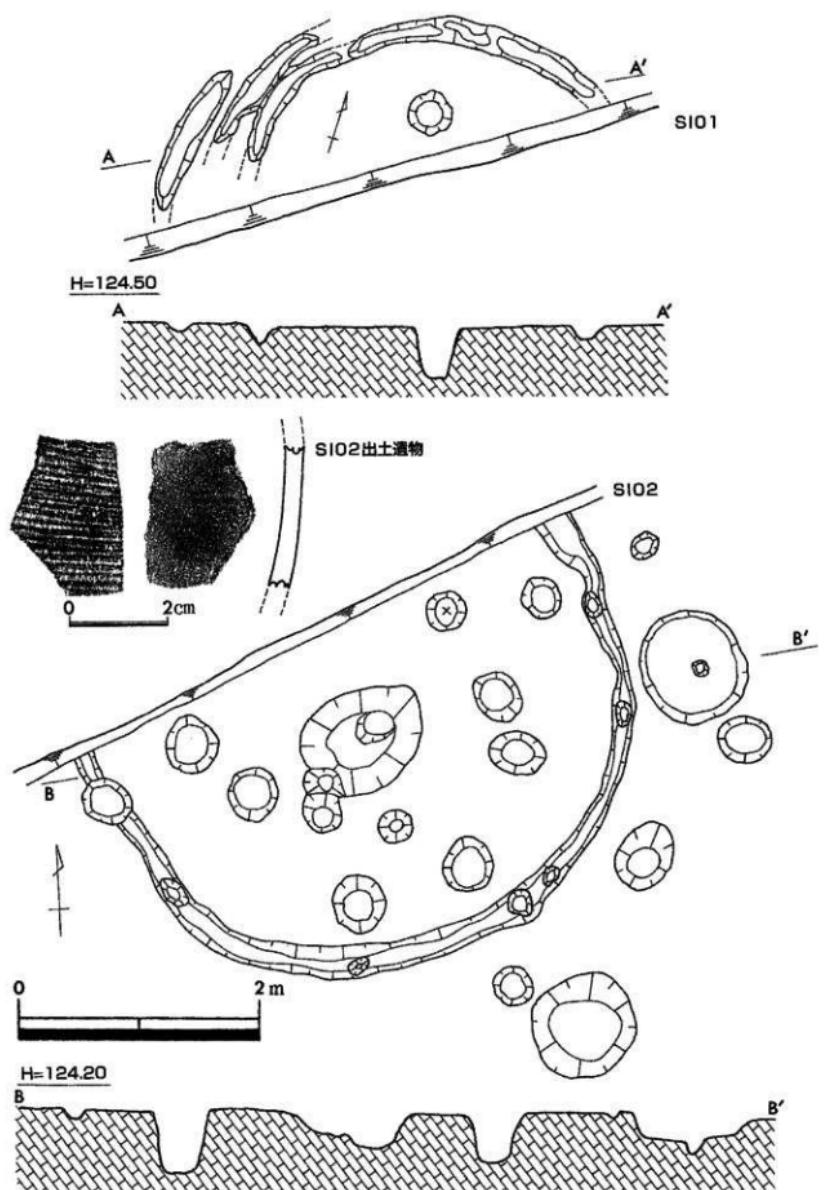
石器は出土量は少なく、包含層からは砾石が1個出土している（第13図1）材質は擦灰岩質砂岩の長円礫で2面に溝状の擦痕が残る。この砾石は金属、石器類を研磨したものではなく、矢柄か骨角器の研磨に使用されたものと考えられる。



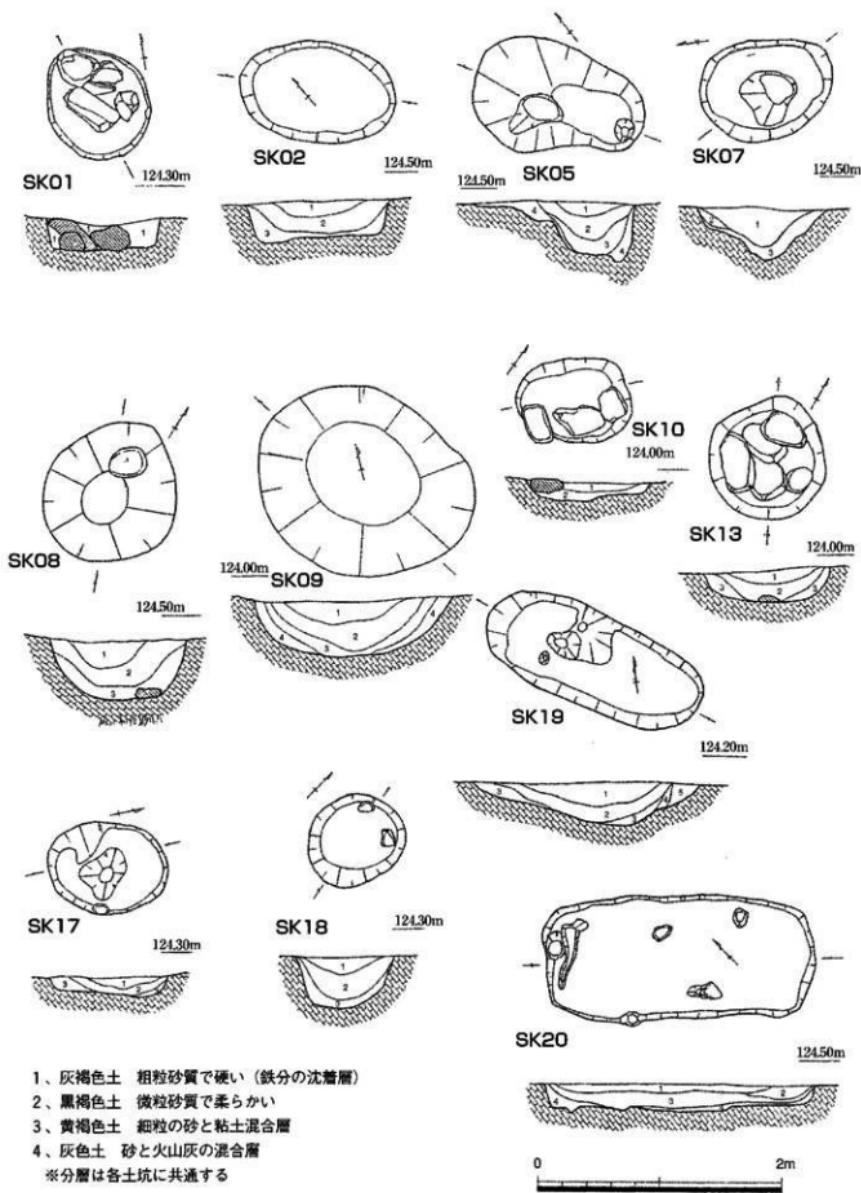
第4図 茶屋谷発掘土層図

土坑計測表(出土遺物のうち「縄」は縄文、「弥」は弥生、単位cm)

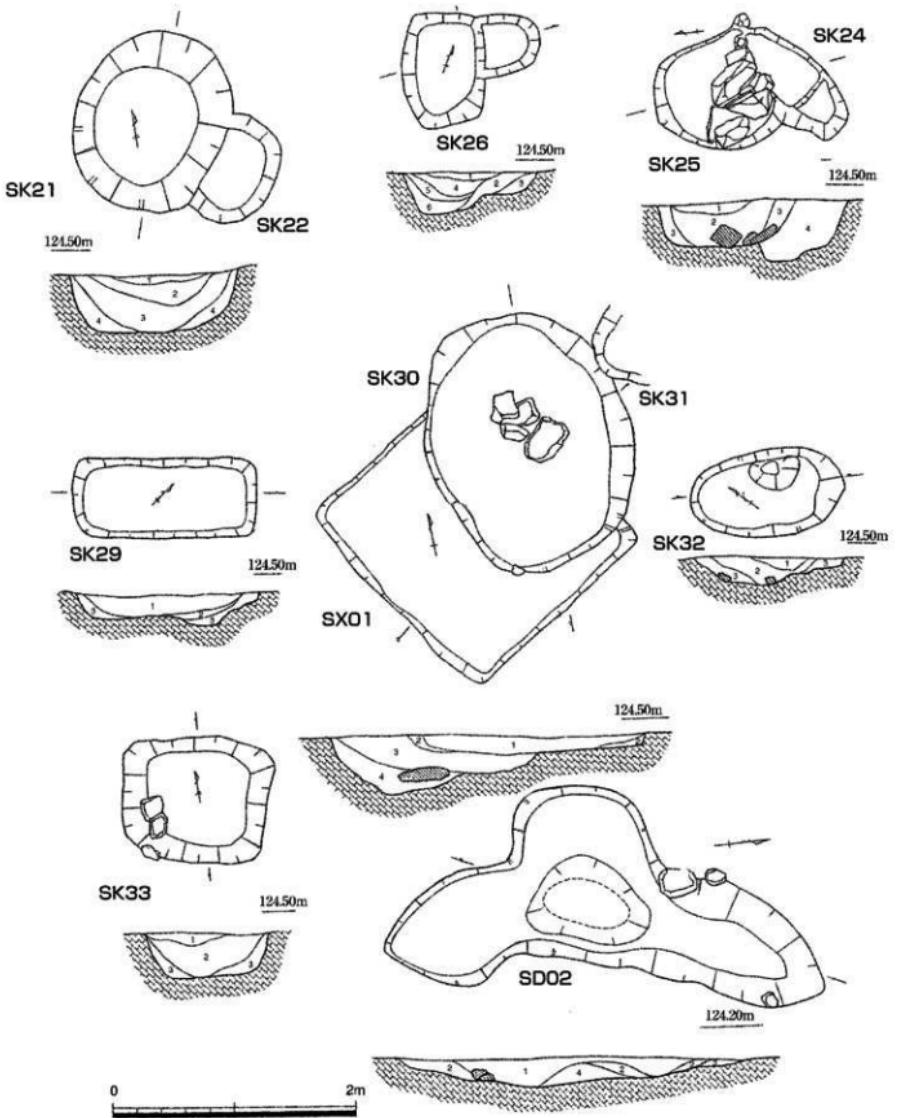
番号	平面形	平面規模	深さ	出土遺物の時期	備考
01	円形	100×75	25	不明	
02	不整長円形	130×85	30	弥後	複合口縁、甕
03	不整円形	65×50	17	不明	
04	不整長円形	85×50	37	不明	
05	不整長円形	140×90	48	弥後	複合口縁、甕
06	長円形	70×60	25	不明	
07	不整長円形	110×80	40	縄後	彦崎KⅡ並行期
08	円形	120×110	60	縄後	彦崎KⅠ並行期
09	円形	180×150	75	縄後	宮滝並行期?
10	不整円形	100×70	11	縄後	粗製深鉢
11	溝状造構				S D O 2
12	溝状造構			11と連続	S D O 2
13	円形	105×95	30	縄後	粗製鉢
14	溝状造構			12と連続	S D O 2
15	消滅				
16	溝状造構			14と連続	S D O 2
17	円形	100×75	20	縄後	?
18	円形	80×75	45	縄後	粗製鉢
19	長円形	190×80	30	弥後	複合口縁、甕、器台
20	長円形	220×100	20	弥後	複合口縁、甕、器台
21	円形	145×125	40	縄後	滋賀里Ⅰ並行期?
22	不整円形	90×70	30	不明	
23	不整長方形	135×90	75	縄後	粗製鉢
24	長円形	115×50	45	弥後	複合口縁、甕
25	長円形	100×95	50	縄後	福田KⅢ並行期?
26	長円形	95×75	30	縄後	粗製鉢
27	不整長方形	135×90	20	不明	
28	長方形	110×95	15	不明	
29	長方形	100×70	18	弥後	
30	円形	130×122	32	縄後	複合口縁、甕
31	長円形	130×80	7	縄後	彦崎KⅡ並行期
32	長円形	125×70	27	弥後	粗製土器
33	不整方形	120×100	38	縄後	複合口縁、甕
34	不整長円形	70×50	50	縄後	彦崎KⅡ並行期
35	円形	90×85	12	不明	粗製土器
36	円形	80×55	15	不明	
37	不整円形	100×90	18	不明	
38	長円形	80×50	15	不明	



第5図 S101・S102遺構実測図



第6図 茶屋谷遺跡遺構実測図 (1:40)



第7図 茶屋谷遺跡遺構実測図（1:40）

IV 遺構に伴う遺物各説（竪穴住居、土坑、溝状遺構）

イ、竪穴住居跡

SI01（第5図）

3条の同心円状の溝痕が検出され、内側にピットも掘りこまれていたことから竪穴住居跡内の周溝とみて、直径4mあまりの円形住居跡と推定した。3次にわたって作り変えられたものであろうか。

遺物を伴わないので時期は不明である。

SI02（第5図）

直径4.2mをはかる円形竪穴住居跡で、中のピット群から推して幾度か改修されたことが考えられる。×印のピットから第5図中央の土師器が出土したことから弥生時代の住居跡と推定した。

周溝の中に間隔を置いた杭跡が残る、周囲の壁を補強するため何等かの施工がなされたものと思われる。

ロ、土坑

平面での観察では38の土坑状の落ち込みを確認したが平面形が長方形の土坑墓とみられるものと不整円形、長円形で底部がすり鉢状の性格不明の土坑がある。（各土坑の法量は前頁の別表に示す）

本稿で取り上げた土坑は遺物を伴うものだけを抽出した。

時期的には縄文後期と弥生後期のもので、一部の土坑を除いて細片が多く、供献された状態ではなかった。また土坑周辺からも細片が出土しており、その土坑が出土した土器の時期に適合しているか疑わしいものもある。

SK02（第8図1～4）

複合口縁を持つ壺の口縁部、胴部、底部片である。口縁端部は外反気味に立ち上がり、口唇部は肥厚する。横書きの沈線が入るものと無文のものがある。口縁屈曲部の稜は鋭い。

第8図3は強く張り出した胴部に太い沈線を入れ、外側に鋭利な工具で刻み目を入れている、台付直口壺であろう、的場式並行期か。

SK05（第8図5）

複合口縁の壺で口縁端部はやや外反して立ち上がり、凹線をめぐらせる。的場式並行期か。

SK07（第8図6.7）

6は口縁内側に2条の沈線を入れ、間に刺突文を連続させている。L縁端部に細かい刻みを入れ、外側は条痕調整である。7は2条の沈線に刺突文を入れ、沈線間に弱い縄文を施して磨消している。彦崎KII、馬取式に並行するとと思われる。

SK08（第8図8.9.10.11）

8は口縁内側に弱い沈線をめぐらせた粗製の浅鉢、9.11は粗製の鉢、10は沈線内に刺突文を入れ、幅広い沈線の間に擬縄文が施されている。彦崎KII式に並行するとと思われる。この土坑からは石鏟が1個出土している（第13図7）

SK09（第8図12～18、第9図19～27）

土器片が最も多く出土した土坑で供献の可能性も考えられる。器種は深鉢、鉢、浅鉢で粗製が多い。

浅鉢のうち**12.13**は口縁部が逆「く」の字に短く屈曲するもので両面ナデで調整し、口縁端部に4条の沈線が入る。**14**は小形の鉢で口縁内側に沈線を入れ、口唇部から斜めの細やかな刻みが入るものである。**15**は両面磨きの朝顔形無文の鉢であるが口縁端部は指頭によってひねられた細かい波形の凹凸となるものである。宮窯式並行期であろうか。そのほかは粗製無文の鉢類で**16.17**は口唇部がやや外反するもの、**18~24**は内傾する。

底部**27.28**は平底と丸底の2種である。

SK10 (第9図29.30)

粗製の深鉢で口唇部がすぼまるものと、ふくらみを持つものの2種である。縄文後期であろうか。

SK13 (第9図32)

粗製の深鉢で、ほぼ垂直に立ち上がり口唇部はふくらみを持つ。縄文後期であろうか。

SK17 (第9図33)

小形の精製浅鉢である。口唇を小さく逆「く」の字に曲げ端部に突刺文、屈曲部に沈線内に刺突文を施している。九州地方の西平式形と思われるが確証はない。

SK18 (第9図34~36)

器種の異なる3個の深鉢でケズリのあと、軽いナデ調整である。縄文後期であろうか。

SK19 (第10図37~39)

37は複合口縁の壺で、端部は外反気味にふくらみ不規則な凹線をめぐらす。**38**は器台上縁部で横描き沈線を施すもので赤色塗彩の痕跡がみられる。**39**は大型器台上縁端部と思われるもので、口縁端部は拡張し、面取りがなされている。器受け部は磨かれ外側は櫛描きの後、ナデている。

的場式に並行する。

SK20 (第10図40.41)

40は器台上縁部で粗い櫛描沈線を施し、赤色塗彩が認められる。**41**は壺である。複合口縁が垂直に立ち上がり、櫛描沈線が入る。九重式に並行する。

SK21 (第10図42.43)

42は精製無文の浅鉢で完形に復元できる。器面の調整はケズリの後、粗い磨きで仕上げている。岩出4類に並行するものであろうか。**43**は深鉢の平底底部片で内側は接合面で剥離しているが、粗いケズリの後ナデ仕上げのようである。

SK24 (第10図44.45)

複合口縁を持つ2種の壺である。2個とも口縁端部は外反気味に立ち上がる。口唇部はふくらみ不規則な凹線をめぐらせている。的場式に並行する。

SK25 (第10図46)

鉢の胴部、逆「く」の字に屈曲する突堤状の稜に薄いヘラ状の工具で刻み目を施している。宮窯、福岡KIIIに並行するものであろう。この土坑からは石器の剥片が2個出土している(第13図6.8)

SK26 (第10図47)

粗製の深鉢である。口縁部はややすぼまる。調整は外側は粗いケズリで内は丁寧にナデしている。

SK29 (第10図48)

複合口縁の壺で、口縁端部は外反気味に立ち上がり粗い凹線をめぐらせる。屈曲部の稜は鈍い。的場

式に並行する。

SK30 (第10図49)

粗製の鉢で両面ナデ仕上げ、内側上端にかすかに縄文が施されるが磨り消されている。彦崎K II式並行期か。

SK32 (第10図50)

複合口縁になっているが口縁端部の幅は狭く、やや内傾しながら立ち上がる。厚みをもつ肩部に比べて頸部以下の器壁は極端に薄くなる。九重式に並行するものであろうか。

SK33 (第10図51~53)

51は精製の鉢の胴部で、沈線内に刺突文を施し、幅の狭い沈線間にには細い刻み目をいれている。彦崎K II式に並行する。粗製土器は2種とも深鉢である。

SD02からの出土遺物 (第11図)

出土した遺物は縄文後期と推定されるものと弥生前期~後期までの土器が層位関係なく出土したことから溝状遺構と判断した。

1は口縁部が短く外反し、口唇部を平坦に仕上げ口唇部下側にD型の刻みを施し、頸部下側に沈線をめぐらせていている。「弥生の土器様式と編年、山陽、山陰」「出雲、隠岐(注3)の1-1様式」に相当する。

2、3は口唇部が逆「L」字状に強く外反し、頸部下には刻み目を持つ貼付突帯が付く。2の口唇部には弱い凹線を施し、3の口唇部は丸みを持ってふくらむ。調整は両面丁寧なナデで仕上げている。「弥生土器様式と編年」(出雲・隠岐)Ⅲ-2様式に相当する。

4、5は口縁部がやや外反して立ち上がる複合口縁の壺で口縁部外面には4は櫛描き沈線、5は粗いヘラ描き直線文を施す。厚みを持つ口縁部に比べて胴部の器壁が薄くなるのはSK32出土の土器によく似る。V-2様式に相当するものであろうか。

6は大形の鼓形器台の脚台部で垂直に近い角度で立ち上がり、擬四線文が施される。この器台にも赤色塗彩がなされていたようである。弥生土器編年のV-2様式に相当するものであろうか。

7は算盤状に胴部が拡張した壺とおもわれる。胴の屈曲部に列点文、その上部に列点文、櫛描直線文、斜格子文を交互に密に描かれている。弥生土器編年の石見地方のⅢ-2様式に相当すると思われる。

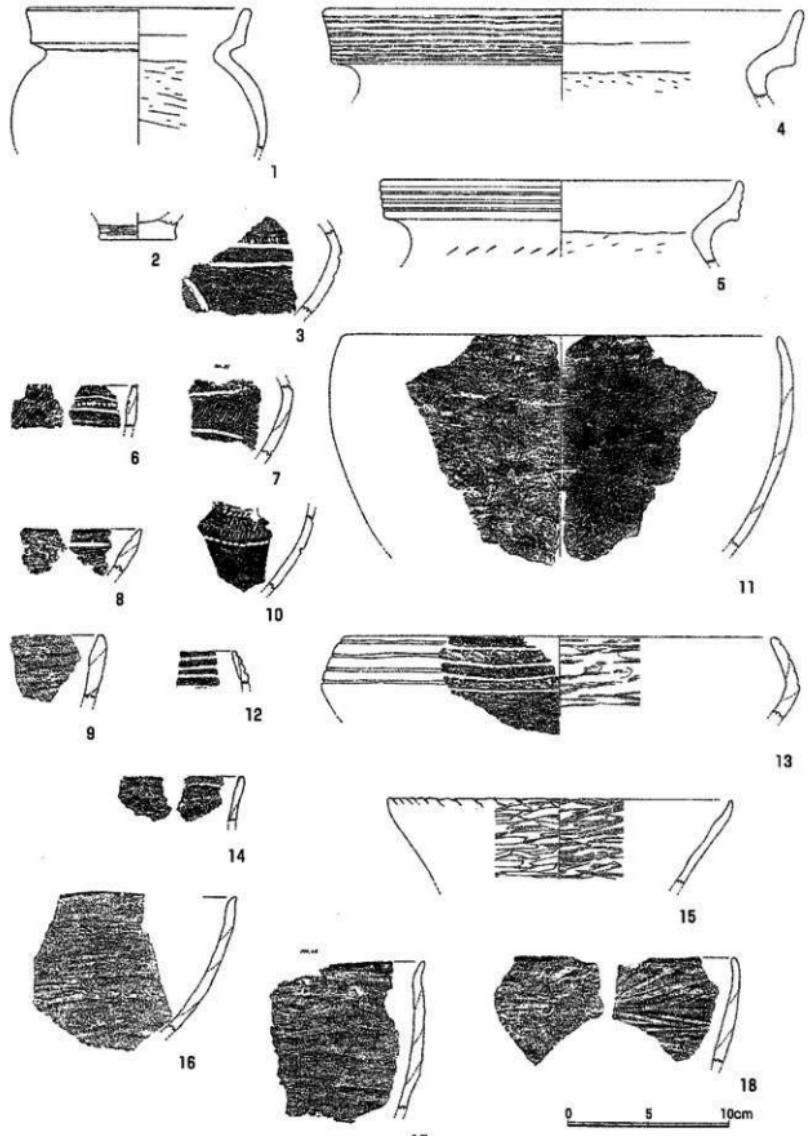
8は複合口縁部の壺で口縁外縁に擬凹線をめぐらすもので弥生土器編年のV-2様式に相当する。

9~12は同様式前後の壺か甕の底部と思われる。

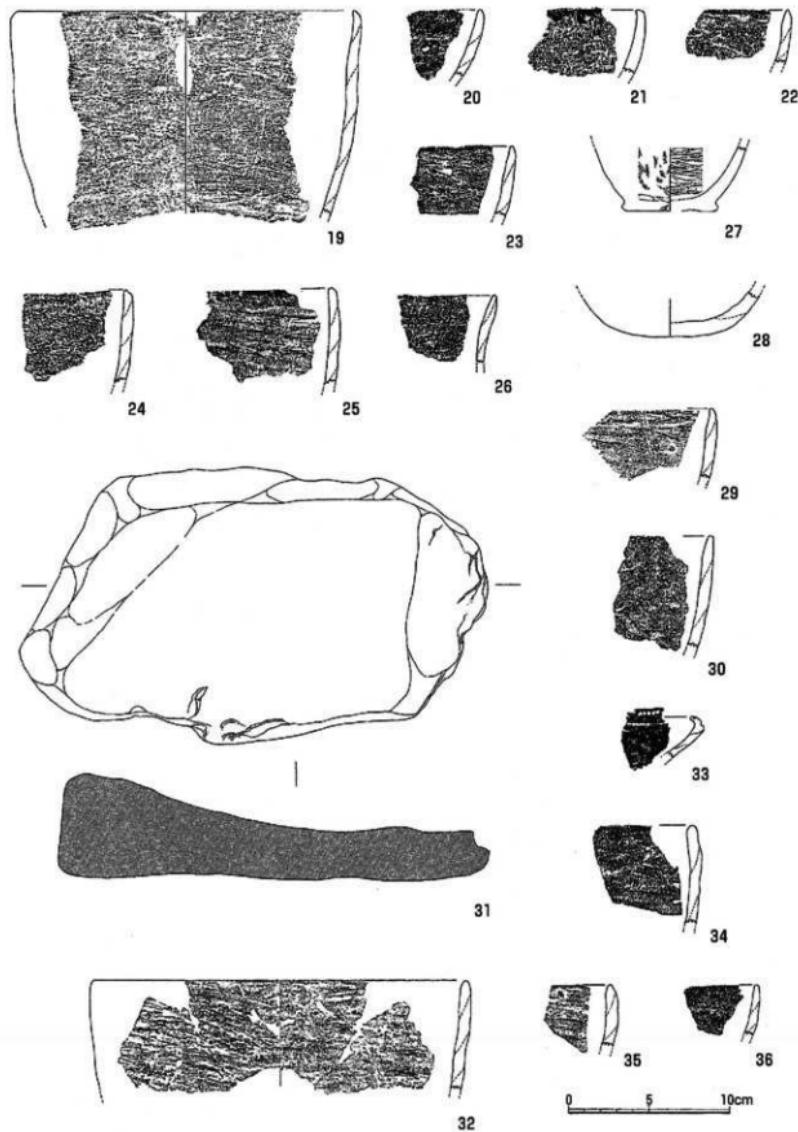
13は注口上器の注口部で、ヘラミガキが施される。弥生時代後期のものと推定される。

14は高杯の杯部とおもわれるもので、口縁端部は拡張して上部に平坦面をつくる。この平坦面に円形浮文を施しているほかに文様はない。弥生中期中葉に位置するものであろうか。

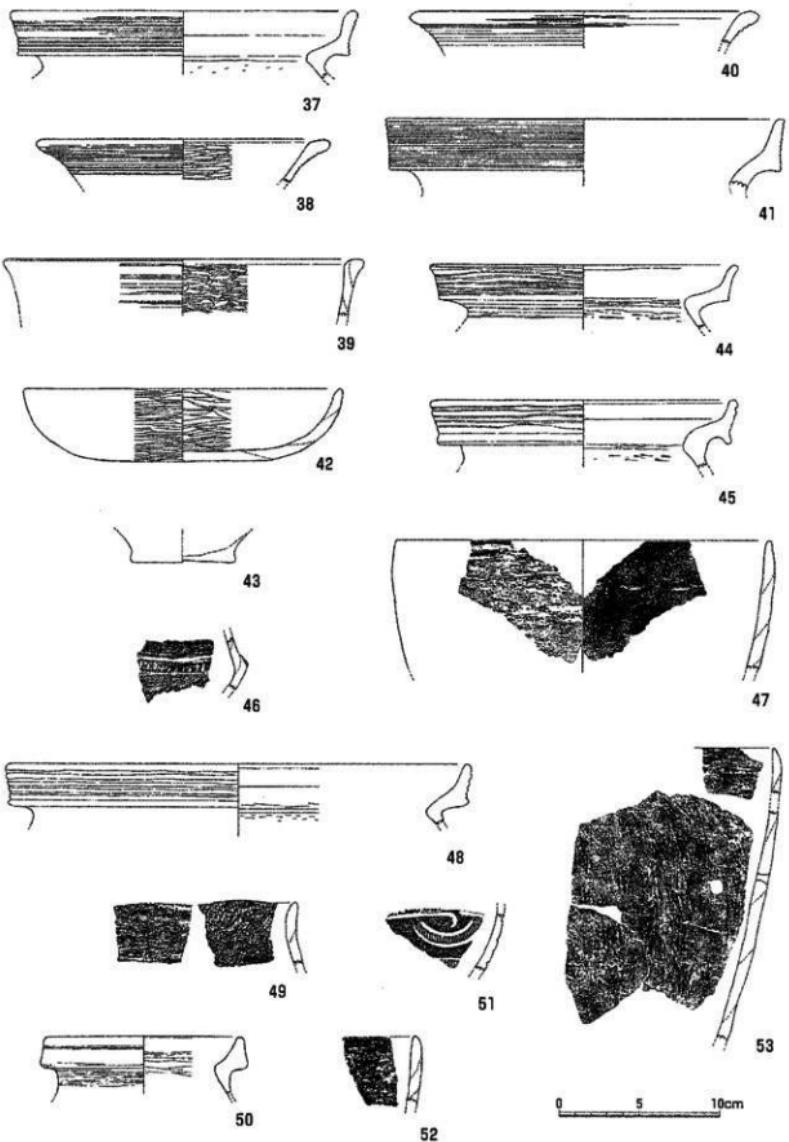
15~17は粗製の深鉢、鉢である。15、16の外側は粗いケズリ、内側は丁寧なナデである。18は両面ナデで仕上げている。



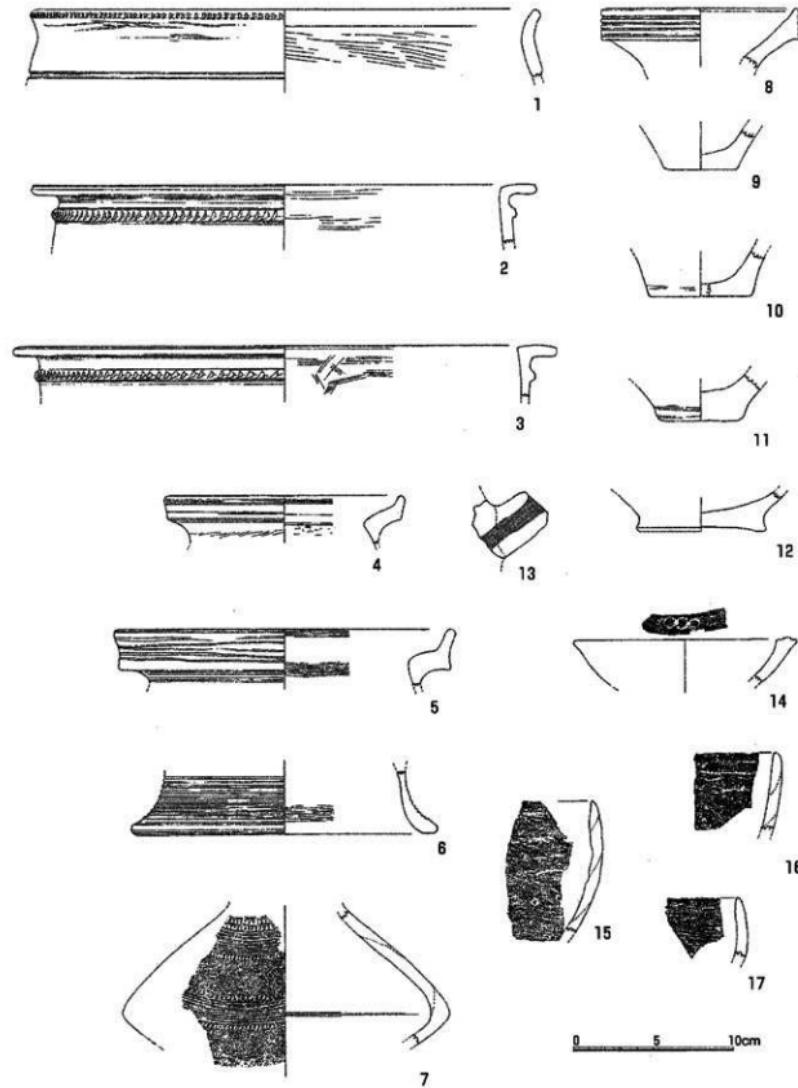
第8図 茶屋谷遺跡出土土器 (1) (1 : 3)



第9図 茶屋谷遺跡出土土器・石器(2)(1:3)



第10図 茶屋谷遺跡出土土器(3)(1:3)



第11図 茶屋谷遺跡出土遺物(4) SD 02

V 造構外出土の遺物（第12図）

造構外で出土した遺物の包含層は水田造成のための覆土で、部分的には水流による堆積土も観察されたことから、この造成にあたって「切り流し工法」が用いられたことも考えられる。取り上げた遺物は層位とは関係なく扱うこととする。

1は浅鉢で、逆「く」の字に屈曲する口縁に3条の沈線をめぐらせ、屈曲部に鋸歯文と縄文を施し、痕跡程度にまで下部を磨消している。2は浅鉢の口縁部に5条の沈線をめぐらせ、狭い沈線間に2条の縄文を施し磨消している。彦崎K II式並行期であろうか。

3は小形の精製浅鉢で、口縁部外側に波形の縄を押しつけた施文がみられる。

4はゆるやかに湾曲して立ち上がる浅鉢で、縦に並行する波形の沈線、横方向に放射状にのびる沈線、沈線に間隔を置いた2条の縄文を施している。

5は深鉢で3と同様に上端と中段に波形の縄を押しつけた文様の間に縄文を施し磨消している。内側はミガキで、外側はケズリのままである。3.4.5は彦崎K II、竹原式並行期と思われる。

6.7は精製の鉢で、6は並行する細い2条の沈線内に刺突文と、沈線間に刻みを入れているもの、7は沈線内に細やかな刺突文、沈線の内側に縄文を施すが、磨消して刺突文に変えている。彦崎K II式並行期と思われる。

8は逆「く」の字に屈曲する口縁部に4条の沈線をめぐらすほか、施文は見られず両面ナデ仕上げてる。宮滝式に並行すると思われる。

9は口縁端部外側に幅の狭い縄文帯をめぐらせ上端に刻み目を入れ、内側に2条の沈線をめぐらせて間に刺突文が入るものである。彦崎K II、馬取式に並行するものであろうか。

10は両面が条痕調整の鉢で、口唇部を僅かに内に折り曲げ、面取りをしている。

11は粗いナデ仕上げの深鉢で口縁外側に1条の沈線をめぐらせている。

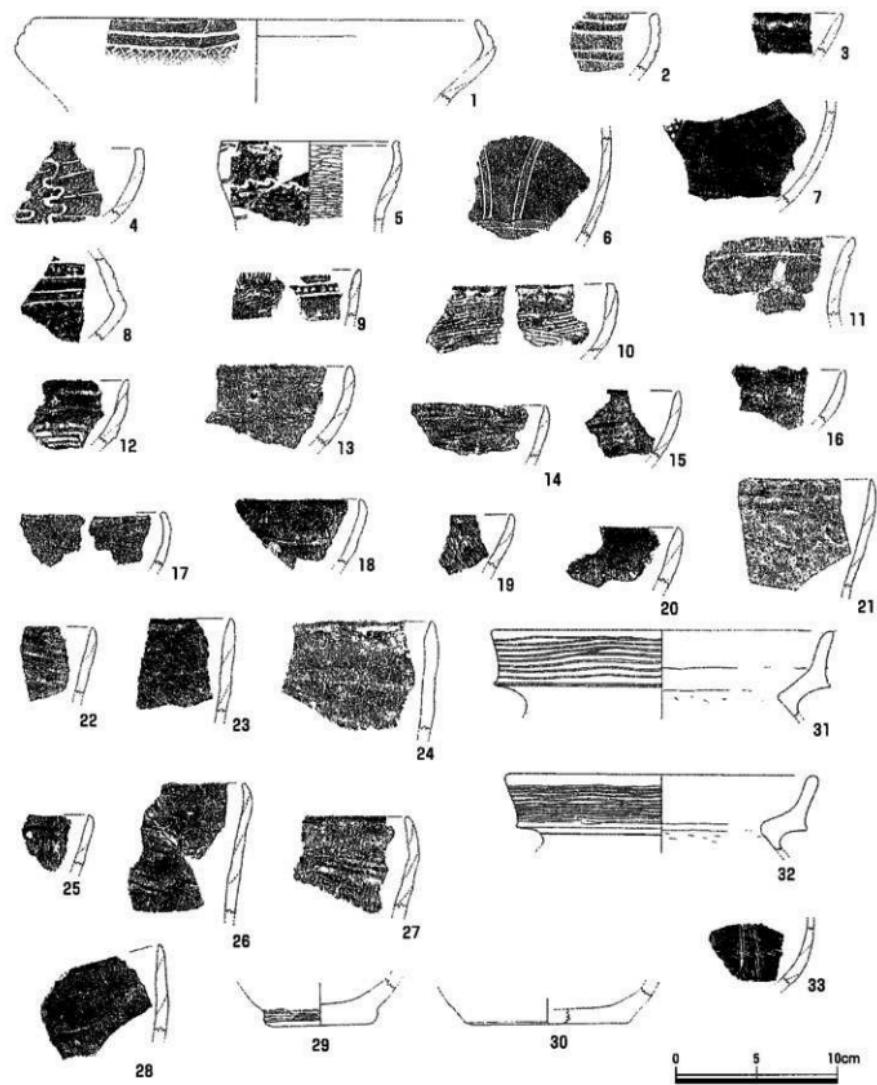
12~19は粗製の鉢、深鉢と思われるものである。

20~28は粗製の深鉢と思われるものである。

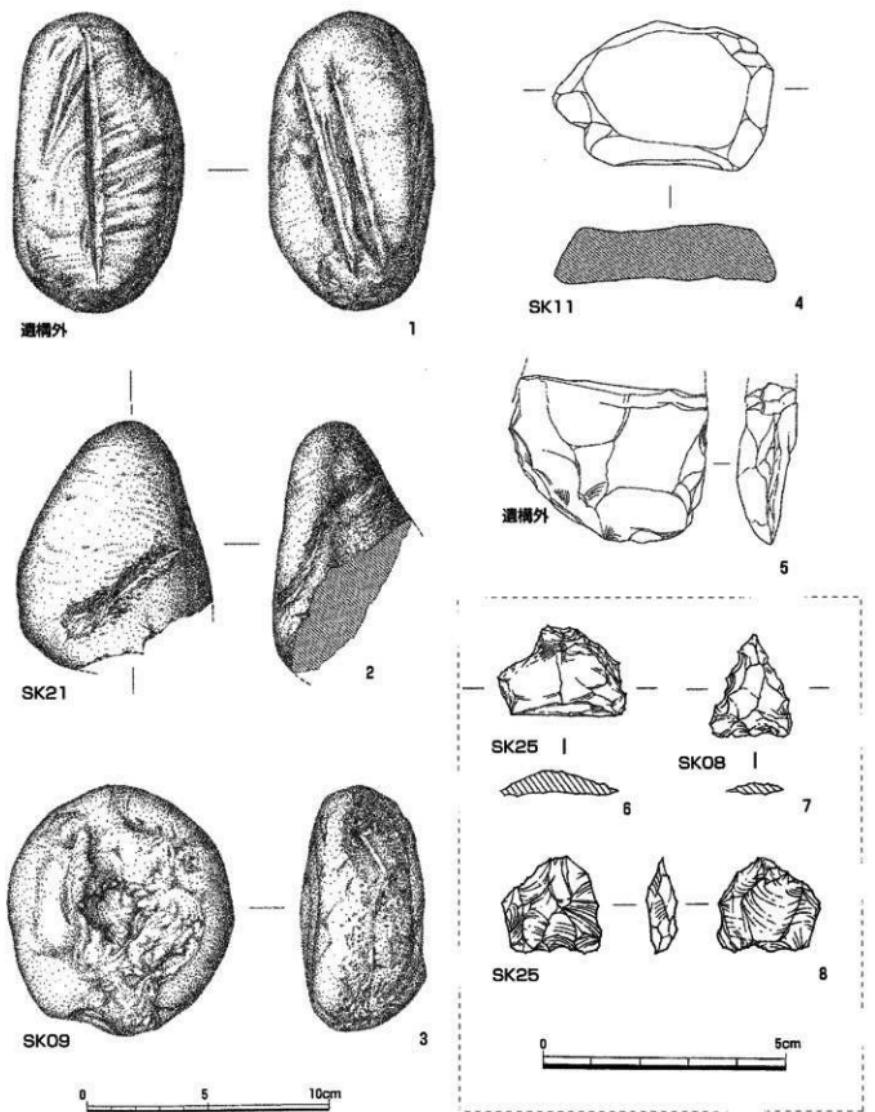
29.30は粗製の深鉢か鉢の底部である。

31.32は複合口縁の壺で、口縁はやや外反気味に立ち上がり、粗い御書きが施される、『弥生土器編年』出雲、隱岐のV-2様式に相当する。

33はハケ日の斜行する弱い刻みをめぐらせた壺の胴部である。31.32に対応する時期のものと思われる。



第12図 茶屋谷遺跡遺構外出土土器 (5)



第13図 茶屋谷遺跡出土石器 (1~5は1:2、6~8は1:1)

VI 小 結

以上、茶屋谷遺跡の発掘調査の概要を報告した。波多川流域で縄文時代後期から弥生時代にかけての遺跡が確認されたのは本遺跡が初めてのことである。

縄文時代の遺構はすべて土坑で、住居跡と見られるものは見ることができなかつた。検出した遺物は粗製土器が多く、いずれも小片であるが縄文時代後期の彦崎KII式並行期から馬取式並行期に収まるものが多かつた。なお各土器片について、粘土紐の接合痕を観察できる資料はすべて内側接合であった。

石器はごく少數であるが石斧、石鉤、剥片などの刃器と石錘、凹石、磨石（叩き石）などの礫器のはかに、骨角器を研磨したものとみられる溝状の使用痕の残る礫器があつた。石材は現地性のものもあるが黒曜石、輝石安山岩（サヌカイト）のように他地方から持ち込まれたものもあつた。

弥生時代の遺構は住居痕2棟と土坑墓がある。住居痕の時期は弥生のどの時期にあたるか不明であるが、土坑内から出土した遺物は丸束式、的場式並行期のものであつた。遺構外から出土した土器は前期、中期のものもあり、中には石見東部の影響を受けているものもあり、本遺跡の地域性を考えさせられる資料もあつた。

遺構が掘り込まれた地山は粒子の細い川砂層であるが葉理状に灰色の火山灰が介入したシマ模様の部分が多い、火山灰の優勢な川砂層である。

この火山灰は三瓶火山起源の降下火山灰で、神戸川上流部の流域では「ハイカ」と呼び、水などによる二次堆積したものを「水ハイカ」と呼んでいる。

本遺跡に堆積している火山灰は波多川上流部（飯石郡掛合町大字波多）への降下火山灰が押し流された二次堆積、つまり水ハイカと見ることができる。

波多地区から山へ隔てた西側は神戸川上流にあたる。ここには島根県教育委員会によって調査が行われた「板屋遺跡」がある。ここで調査資料によると火山灰層は上下2枚であることが確認され、上層を「三瓶大平山降下火山灰」と呼称され、その時期はc14測定でB.P3710±130、下層の火山灰を「三瓶角井降下火山灰」と称されc14測定結果はB.P4780±100の値が報告されている。

板屋遺跡の発掘調査現場では上層の火山灰を第1ハイカと呼び、下層の火山灰を第2ハイカとして調査が行われ、第1ハイカ上層の黒色土層からは縄文時代後期以降の遺構、遺物が出土し、第2ハイカの上部黒色土層からは縄文時代前期～中期前半の遺構、遺物が出土し、火山灰降下の年代と符号している。したがって三瓶山周辺に分布する2枚のハイカは縄文時代前期から後期にいたる有力な鍵層としての示唆を与えたことになる。

本遺跡の調査にあたって二次堆積ではあるものの第1ハイカ上の遺構、遺物であるということをふまえ、検索にあたることができたことは幸いであったことを付記する。

注1、加藤義成校注『修訂出雲國風土記参究』昭和56年

2、松井整司、福岡孝、1996『三瓶火山の浮布黒色土以後の火碎物の層序と年代』地球と環境（島根大学 地球資源環境学教室、研究報告15）

3、松本岩雄『弥生土器の様式と編年、出雲、隠岐地域』木耳社 1992

参考文献

- 鎌木義昌編 『日本の考古学「縄文時代」』 河出書房新社 1978
- 『島遺跡発掘調査報告書、第1集』 北条町教育委員会 1983
- 『縄文土器大図4』 小学館 1991
- 『縄文文化の研究V 5「縄文土器」』 雄山閣 1994
- 小林達雄編 『縄文土器の研究』 小学館 1994
- 『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994
- 柳浦俊一編 『森遺跡、板屋1遺跡、森脇山城跡、阿丹谷江堂跡』 島根県教育委員会 1994
- 角田徳幸編 『板屋2遺跡(第6回中四国縄文研究会資料)』 島根県教育委員会 1995
- 内田律人編 『門遺跡』 島根県教育委員会 1996

VII. 附編 塚脇遺跡の調査と出土遺物について

茶屋谷遺跡の発掘調査終了後、大字宮内の塚脇遺跡（散布地）の発掘調査を行った。この遺跡も茶屋谷遺跡と同様に区画整理事業に伴う調査である。

調査に至った経緯は、施工前にハギ取った耕作土中に集中して土器片が出土したことから工事を中断して発掘調査を行うことになった遺跡である。

調査地は過去に幾度かの区画整理が行われた水田で、北東から流れて須佐川に合流する朝原川に沿う段丘上に広がる。周囲の耕作土直下の土層は大小の山石、川石が堆積する氾濫原で、部分的にシルトが介入している。

調査は遺物採取地点のほぼ原地形の残る200m²区画に3か所のグリッドを設定して掘り下げたが、耕盤下層から厚いシルト層となり、間に川砂の葉理層が観察されたことから水流による堆積土であることがわかった。以下の掘り下げは湧水のため掘り下げ不能となったことから調査を打ち切った。

この地域では三瓶火山起源の火山灰、いわゆるハイカの堆積層は認められなかった。

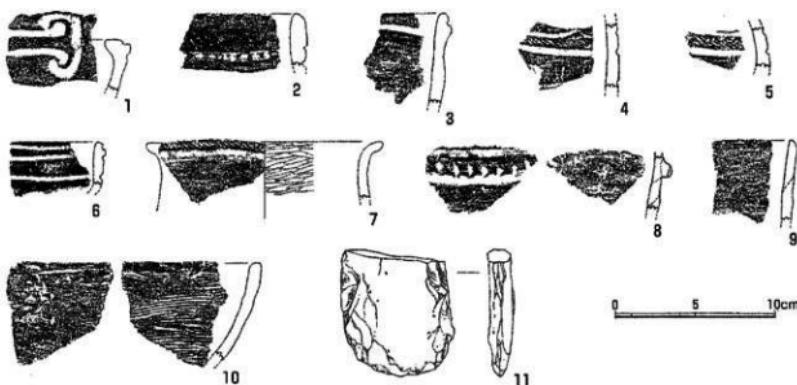
発掘調査時には遺物は検出できなかったが、本書では表土ハギ取り直後に採取された遺物を掲げる。

1は縁帶文土器深鉢である。口縁部を内側に拡張させ、口唇部から外側に末端が渦巻く太い沈線を施し上端外側の沈線間に繩文をいれ磨消している。福田K II式に並行する。

2は波状口縁の深鉢で口縁部をふくらませ、口縁外側に狭い2条の沈線を施し、中に刺突文がはいるが繩文は見られない。3は口縁部を肥厚させ上端に太い沈線を施している。2, 3は彦崎K II式並行期と思われる。

4, 5は深鉢の胴部で、太い沈線の間に繩文を施し磨消している。福田K II式並行期か。

6は屈曲して垂直に立ち上がる浅鉢の口縁部で上端に2条の沈線を入れて突帯状にふくらませ下段にも沈線を施している。7は口縁部が大きく外反する深鉢で、口縁外側に狭い繩文帯をめぐらせている。6, 7は彦崎K II式並行期にあたる。



第14図 塚脇遺跡出土遺物

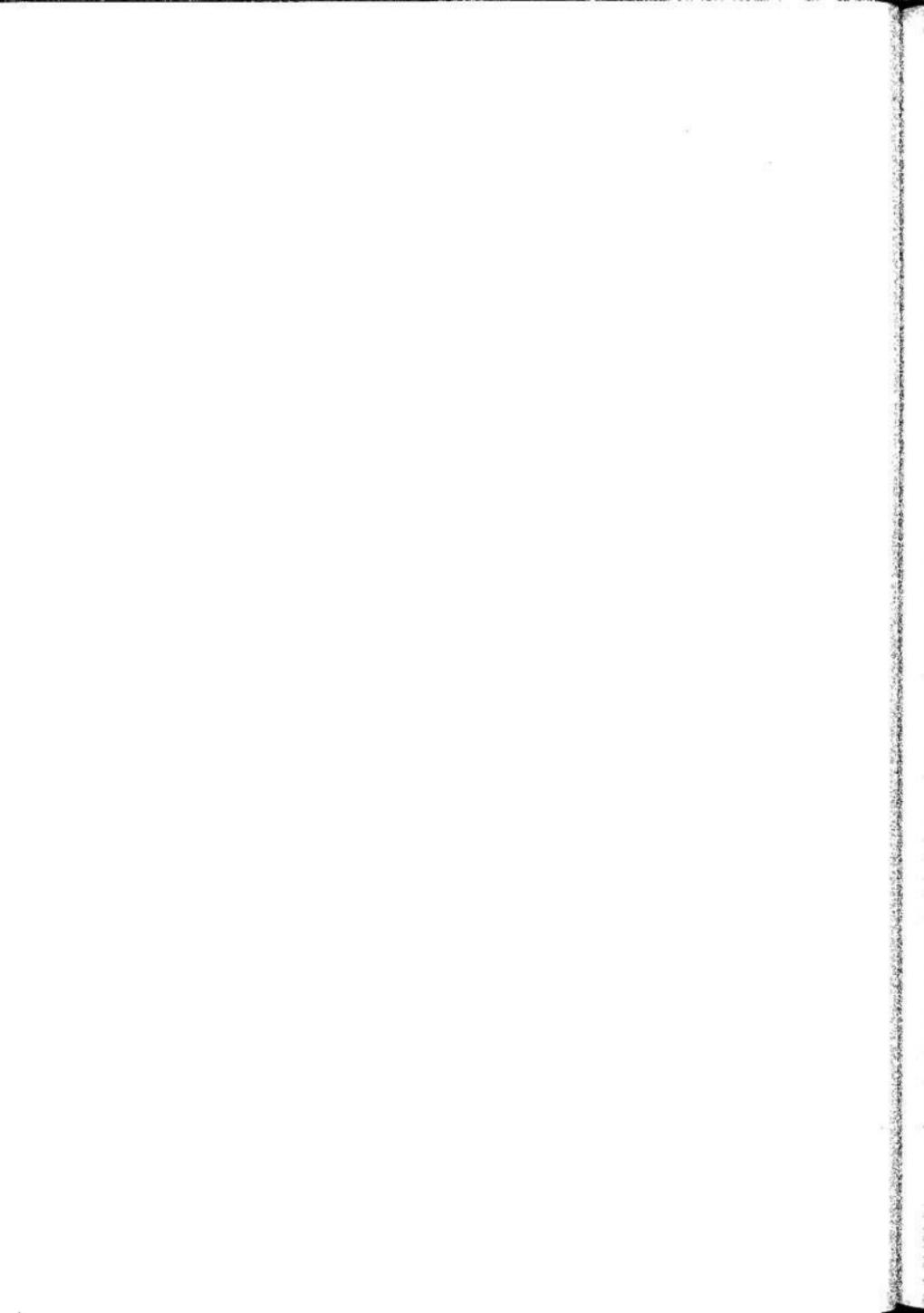
8は刻み目を持つ突帯文土器である。貼り付けた突帯は丸みを持って下方へ垂れ下がり、粗い刻みはD型を示している。この上器は深鉢の口縁部の可能性も考えられる。

9.10は粗製の深鉢と鉢で、10の鉢の内側は2枚貝による調整がなされている。

11は石斧の破片である。材質は流紋岩質凝灰岩で頻繁な使用によってか先端は摩耗している。

図 版

図版番号は本文挿図番号と一致する





茶屋谷遺跡遠景（写真中央、西側から）



耕作土除去のあと
試掘、重機による荒掘り



荒掘り終了後
遺構の検索に着手



遺構の検出状況
SI01・SK31・
SX01・SK28・29



遺構の掘り下げ状況



遺跡西側の土坑群
(東側から)



SK09（純文後期）の土層



SK20（弥生後期）の土層



SK24・25切り合う2つ
の土坑



東側土坑群、住居跡の
発掘状況

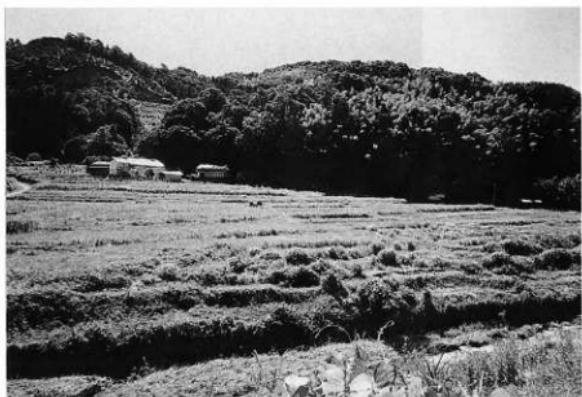


S102の検出



S101とその周辺の造構





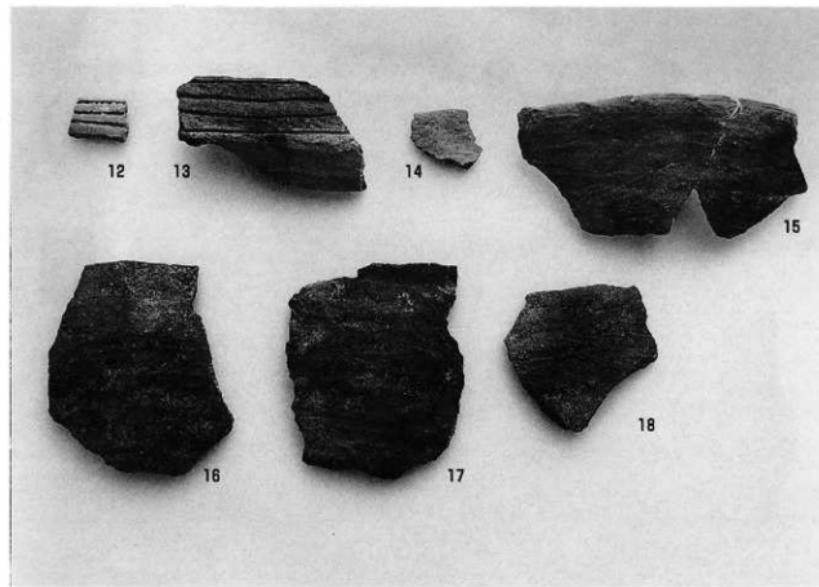
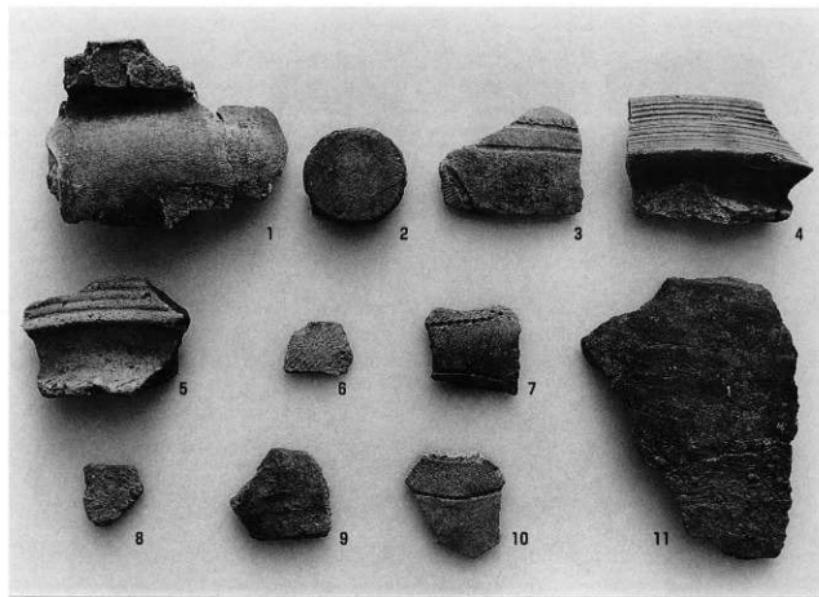
塚脇遺跡の遠景（写真中央の山裾水田）



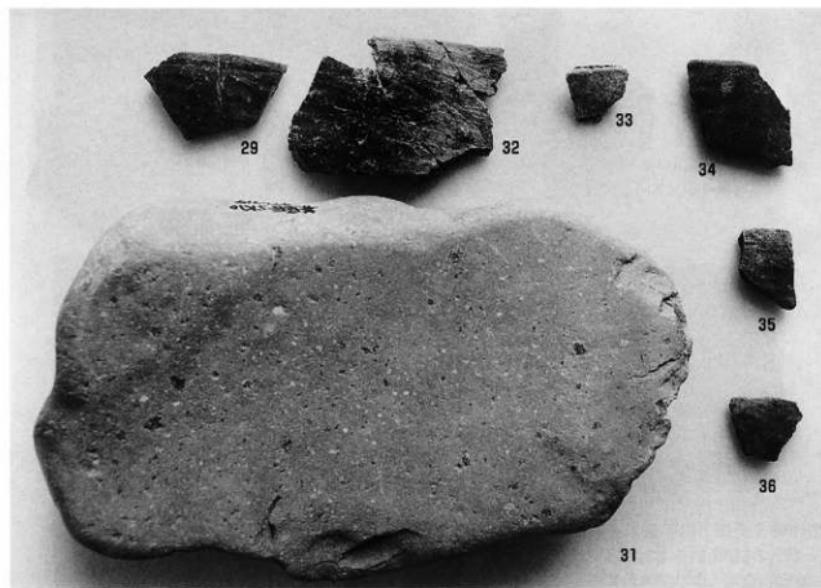
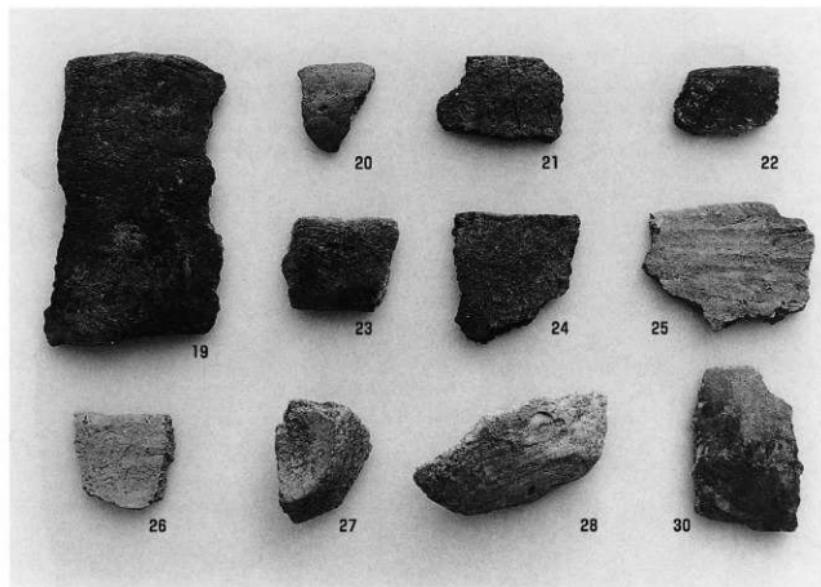
グリッド振りによる遺構の確認
(耕盤直下はシルト層)



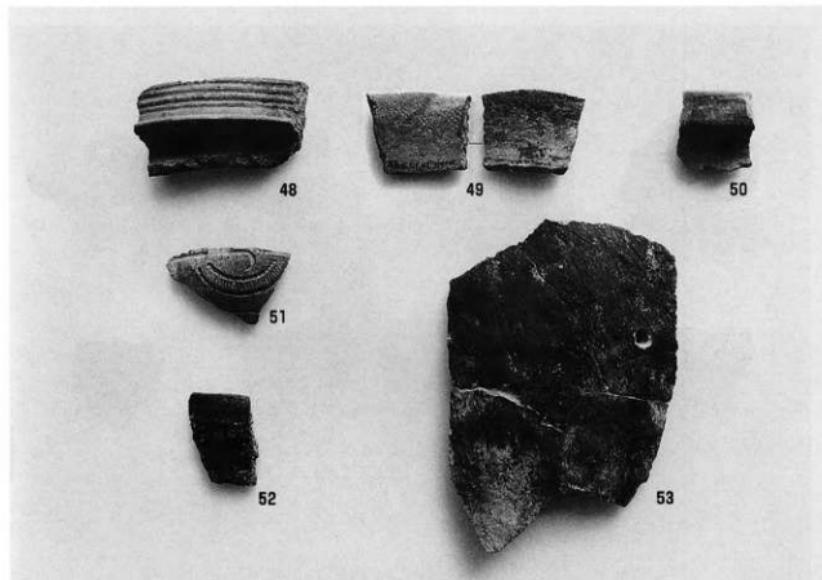
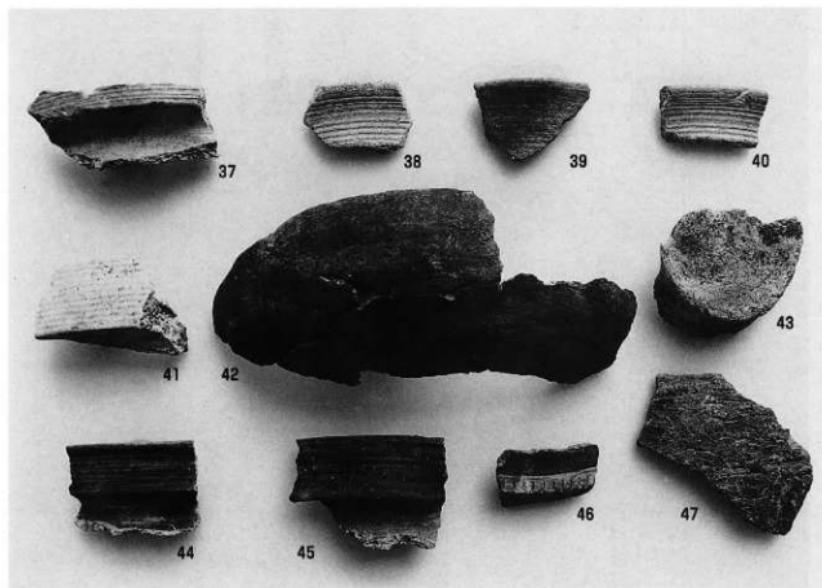
シルト堆積層内に見える砂の葉理（水流による堆積層を確認）
下層は湧水のため、調査打切り



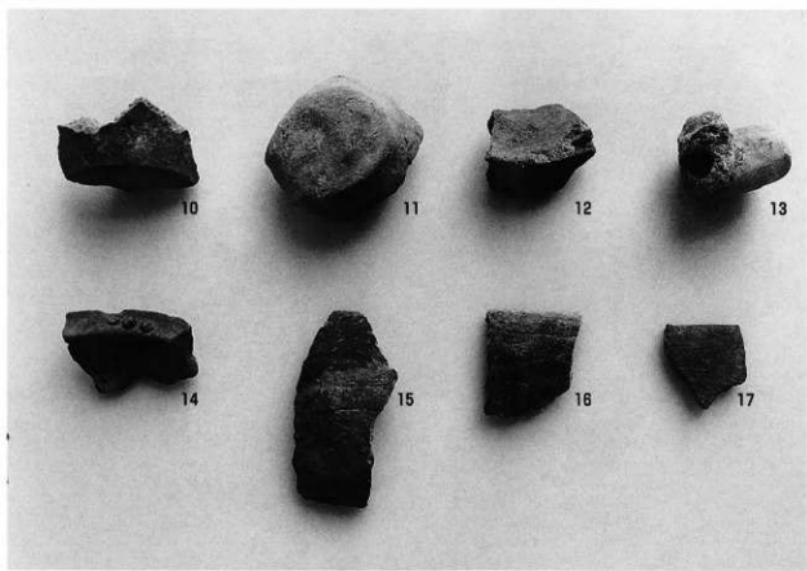
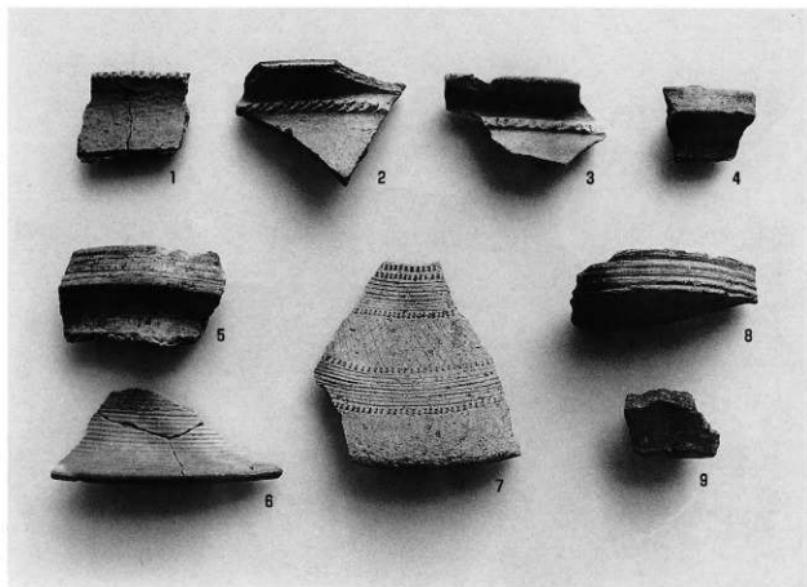
茶壓谷遺跡出土土器（1）



茶屋谷遺跡出土土器 (2)



茶屋谷遺跡出土土器 (3)



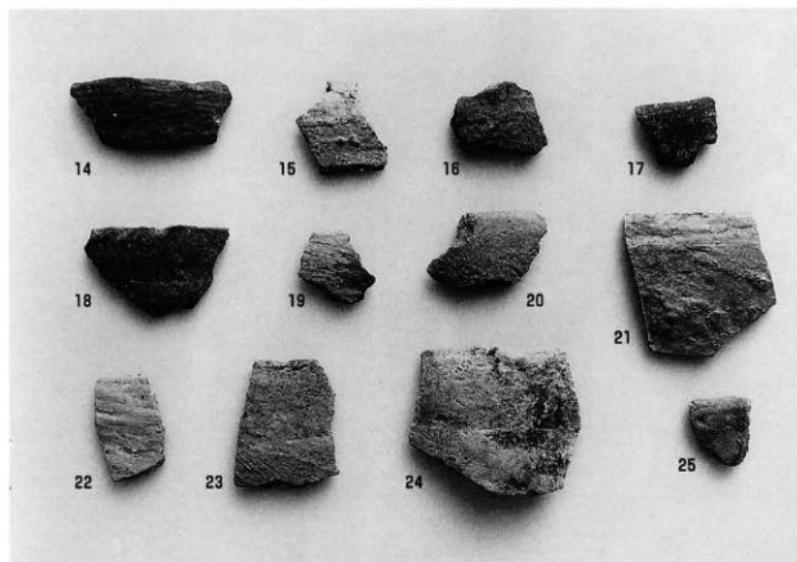
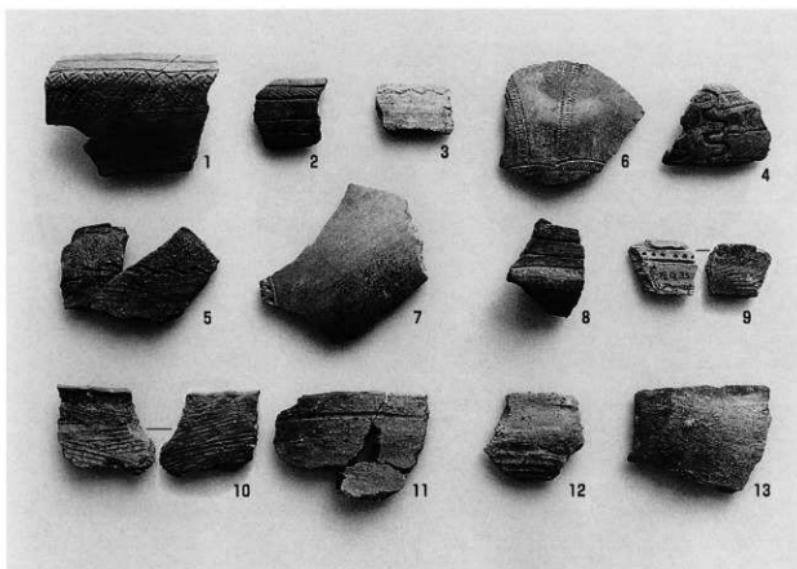
茶屋谷遺跡 SD02 出土土器



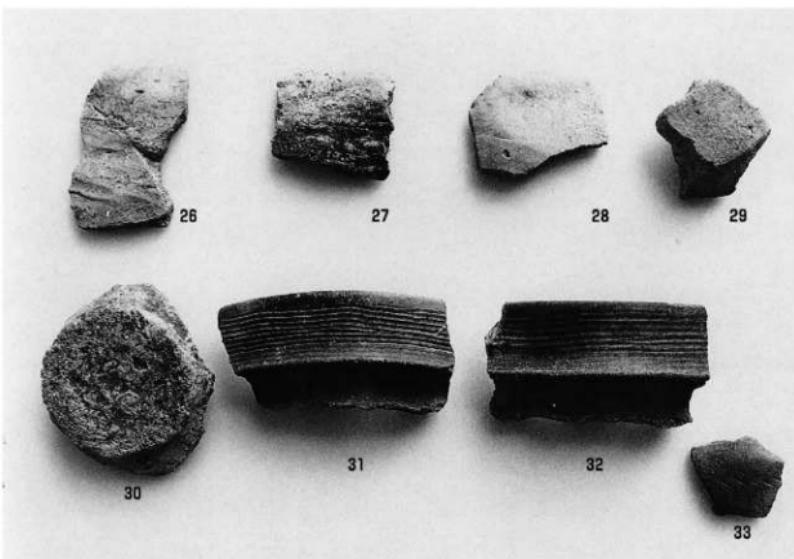
2. SK21、3. SK09、4. SK11、1・5. 遺構外出土



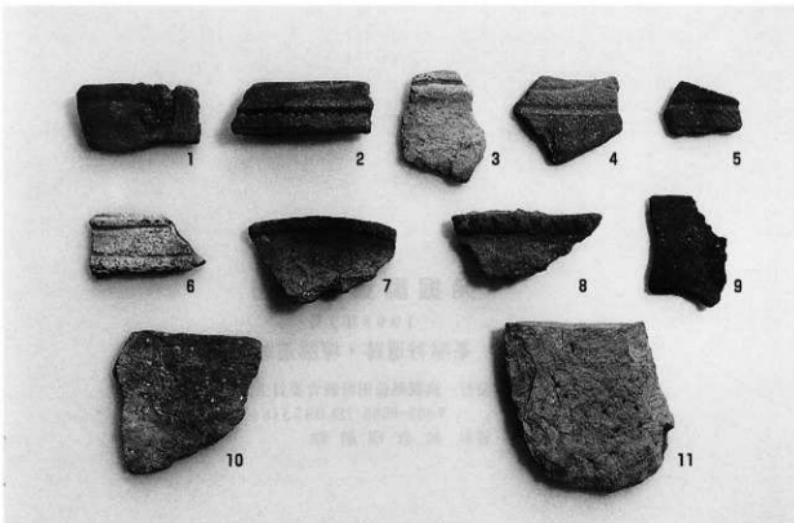
8・6. SK25出土、7. SK08出土



茶屋谷遺跡遺構外出土土器（1）



茶屋谷遺跡遺構外出土土器 (2)



塚脇遺跡出土土器

発掘調査報告書

1998年1月

茶屋谷遺跡・塚脇遺跡

編集・発行 島根県佐田町教育委員会
〒693-0506 TEL 0853(84)0019
印刷・製本 総合印刷株